

総合常任委員会行政視察報告について

このことについて、総合常任委員会委員長から別紙のとおり報告があったので付議する。

平成 25 年 12 月 12 日

三笠市議会議長 谷 津 邦 夫

総合常任委員会行政視察報告書

平成 25 年 9 月 26 日第 3 回定例会において承認を得た当委員会行政視察の実施結果について、三笠市議会基本条例第 12 条第 4 項の規定により、次のとおり報告する。

平成 25 年 12 月 12 日

総合常任委員会委員長 武 田 悌 一

三笠市議会議長 谷 津 邦 夫 様

記

1 視察期間

平成 25 年 11 月 13 日（水）～15 日（金）

2 視察項目

(1) 新潟県糸魚川市

糸魚川ジオパークについて

(2) 埼玉県秩父市

ジオパーク秩父について

3 視察参加者

武田委員長、澤田副委員長、谷津・齊藤・猿田・扇谷・谷内・丸山・儀惣・高橋各委員

4 視察の内容

別紙報告書のとおり

(別紙)

総合常任委員会行政視察報告書

1 視察項目

(1) 新潟県糸魚川市 「糸魚川ジオパークについて」

視察地である糸魚川市は、平成 25 年 3 月末現在で人口 46,751 人、高齢化率 34.3% である。平成 17 年 3 月 19 日に、糸魚川市、能生町及び青海町が合併し、現在の糸魚川市となっている。糸魚川市には、2つの国立公園（上信越高原、中部山岳）と3つの県立公園（久比岐、白馬山麓、親不知子不知）があり、起伏に富んだ山々が織りなす景観に魅了され、また貴重な高山植物の宝庫として、毎年多くの観光客が訪れている。

糸魚川ジオパークは、平成 20 年に日本ジオパークに認定され、翌年の平成 21 年には日本初の世界ジオパークに認定されている。当ジオパークの特徴は、世界最古のヒスイ文化と断層に沿った塩の道など、大地の生い立ちと豊かな自然、そこに暮らす人々と大地のかかわりを見ることができる。特に、フォッサマグナの西側の断層である「糸魚川－静岡構造線」が通るなど、日本列島の形成を示す貴重な地質や特徴的な地形を見ることができ、24のテーマを持ったジオサイトが設定されている。

糸魚川市の取り組みは早く、昭和 62 年から地質資源をまちづくりに取り入れ、世界に先駆けて平成 3 年には、見どころとなる場所を「ジオパーク」と呼んでいた。その後、点在する合併前の地域資源を一体化させるために、ジオパークの認定に取り組んだ。現在の取り組みとしては、ジオパーク観光ガイドのためのガイド養成講座、教育面においては、小学校の副読本の作成や姉妹ジオパークの香港へ中学生を派遣する事業を行っている。また、ジオパークを広く市民に定着させるため、「ジオパーク検定」が実施されていたり、20歳代から40歳代への認知度を高めるために、この年代の多くが児童生徒の保護者であることに着目し、毎月1回を「ジオ給食の日」とし、間接的な周知方法を行っている。

ジオパーク認定前の観光客が、約4万人であったのに対し、認定後は6万人に増え、修学旅行も5件程度であったものが30件以上に増えている。また、糸魚川市のジオパークに対する予算措置は、人件費を含め約1億1000万円程度で、経済波及効果としては、約2億6000万円程度と試算している。

(2) 埼玉県秩父市 「ジオパーク秩父について」

視察地である秩父市は、平成 25 年 3 月末現在で人口 67,451 人、高齢化率 28.0% である。平成 17 年 4 月 1 日に、秩父市、吉田町、大滝村及び荒川村が合併し、現在の秩父市となっている。秩父市では、日本三大曳山祭に数えられる「秩父夜祭」が、毎年 12 月に開催され、30 万人以上の観光客が訪れるほか、近年羊山公園に植栽した芝桜の見学に 58 万人以上の花見客が訪れている。

ジオパーク秩父は、平成 23 年に日本ジオパークに認定され、秩父市単独ではなく、横瀬町、皆野町、長瀬町及び小鹿野町の 1 市 4 町で、秩父地域として広域で取り組んでいる。

当ジオパークの秩父地域は、奥秩父山地・上武山地、外秩父山地に囲まれ、その中心に丘陵や河岸段丘のある低い土地が広がる秩父盆地がある。また、多様な歴史的・文化的資源として、旧石器から戦国時代の遺跡古墳群、和銅に関する遺跡、秩父往還、秩父事件及び秩父札所巡礼など、有名で貴重な歴史・文化遺産が多数あり、34 のジオサイトがある。

秩父市は、地質学研究の長い歴史があり、「日本の地質学発祥の地」と言われる土地柄であり、ジオパークの認定に向け取り組んだ際、地質学的には十分であるが、地域にどのように活かしているかが足りないとのことから、1 度不認定になっている。その後、認定され、「ジオパーク」という冠がついたことで、行政視察や研修、テレビ取材などが増えた。現在の取り組みとして、スクールバスを活用したジオツアーの実施、旅行会社による体験型ツアーの実施など規模は小さいが、積み重ねを重視し、事業を実施している。観光地として 40 年以上が経過し、この間に多く札所案内人や NPO 法人などのガイドが誕生しており、新たな組織をつくり新たに人を集めガイドを育成するのではなく、すでに活躍しているガイドを活用し、説明の中にジオパークの要素を取り入れるよう展開し、ガイドを養成していた。

ジオパーク秩父の運営に要する経費は、現在総務省が行っている定住自立圏構想の推進に関する補助金約 400 万円程度で行っており、ジオパークで整備する看板は、1 市 4 町すべて同じデザインで統一されているが、その経費も補助金で賄われている。この他の国や県からの補助金で、鉄道（SL）を使ったモニタージオツアー「ジオ鉄」などの各種の事業を展開している。

2 総括

ジオパークの事業効果を疑問視する声がある中、これからジオパークを推し進めていくためには、市民の認識不足を解消し、認知度を向上させていくことがまず必要ではないかと思われる。秩父市においては、市職員にも浸透していない部分もあり、「いまさら聞けないジオパーク」と題して講演会も実施しており、糸魚川市の「ジオ給食の日」など工夫を凝らした継続的な周知活動が必要であることを実感した。また、いずれの市も、ジオパークを学校教育、社会教育に取り込んでおり、当市もさらなる充実と「三笠らしさ」を織り交ぜていかなければならないと感じたところである。

そして、ジオパークとして認定され、これから実際に進めていくうえでは、ジオツアーなどのガイドをはじめとする人材の育成が急務であると感じた。糸魚川市では、ジオパークの魅力を紹介できることを目的に講座を受講した宿泊施設や飲食店の方がジオパークマスターとして活躍している。魅力のあるジオパークであっても、その魅力を正しくわかりやすくそして楽しく伝えられる人材がいなければ、さらなる進展は難しく、ガイドを含めジオパークに関わる人材の育成は、当面の課題であると感じたところである。

また、ジオパークごとに、まちの歴史・文化、人口や財政規模に差があり、さらにはまちづくりにおけるジオパークの位置づけにも差があり、糸魚川市では市費を投じている一方、秩父市においては、補助金の範囲内で運営しており、どの程度の投資を行うかが、今後の大きな課題であることを再認識した。当市の体力に見合い、かつ魅力のあるジオパークとするため、どの程度の投資が適切か、そして、商工業や農業など関係団体と協力して、商店や飲食店などが広く参画でき、経済をジオパークと連動させ発展する取り組みを、市民の意見を聞きながら議論を進めていかなければならないと感じたところである。

最後にいずれの市も、行政が主導となってジオパークを推進しているが、最終的に経済発展につなげていくため、産業部門の部に、専門の職員を配置していた。このことは、ジオパークの普及、発展そして再認定のに向けた取り組みの難しさが反映されているものと思われ、当市においても検討の必要性を感じたところである。

今回の調査において、地質の重要性、教育への活用、観光を通じた経済発展など、共通の考え方のものであれば、ガイド養成の手法、予算のあり方など、地域に合わせた考え方を知ることができ、今後「三笠ジオパーク」を進めていく上で大変有意義な視察であった。